

## 能界展望(昭和53・54年)

著者	竹本 幹夫
雑誌名	能楽研究 : 能楽研究所紀要
巻	5
ページ	123-133
発行年	1980-11-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00020291">http://hdl.handle.net/10114/00020291</a>

## 能界展望（昭和53・54年）

竹本 幹夫

### 〔はじめに〕

昭和53・54両年の能界の情勢は、主要な潮流をほぼ次の三つに集約できよう。第一に、能界の指導的地位にある人々が数多く他界し、必然的に世代交代を余儀なくされつつあること、第二に、国立能楽堂の建設が具体化し、その機能と意義とを、より現実的な立場から再確認すべき時に来ていること、第三に、新しい企画と方向性を持った能会が次々に発足し、一方では注目すべきいくつかの文化事業が行われたこと、の三点である。さらに、これらを取りまく大状況として、従来より指摘されていた、観客層の拡大と能界自体の大規模化という現象が存在し、これらが複雑に関連しあいながら、この両年の流れを形成していったもののようである。以下、前記三点を中心に話をすすめて両年の能界の流れとその問題点を概観し、この時期の主な出来事の要を列記して、文末に一括掲出することとしたい。いちいちの出来事の紹介については、これを主に能楽書林発行の「能楽タイムズ」等の諸書により、又、この部分では原則として敬称を省略させていただく。

### 〔世代交代の流れ〕

この両年も、能界は、二人の人間国宝と一人の芸術院会員とを

世に送り出した。高橋進氏（昭和53・重要無形文化財保持者個人指定）の重厚篤実な芸格、三宅藤九郎氏（昭和54・同上）の大らかで進取的な芸風、茂山千作氏（昭和54・芸術院会員）の軽妙にして洗練された舞台は、いづれも斯道随一と万人の認めるところであろう。さらに、小鼓、笛、能面の製作につき、後掲三氏が文化財保存技術保持者に選定されたことも、錦上に花を添える慶事である。能界の発展のためにも、一層の御活躍をお祈り申し上げる。

他方、残念なことながら、多くの方々が他界されたことは、両年を通じての重要な問題の一つであろう。能界における豊嶋弥左衛門・野村万蔵・観世寿夫・梅若六郎・奥野達也、学界その他における香西精・丸岡大二・西尾実らの諸氏の他界は、能界がそれぞれの方面で多くの指導者を失ったことを意味しているからである。今後能界各方面においては、これまで以上に四五十歳台の人が主流となるべき傾向は必至と思われる。偉大な先達を失った悲しみをのりこえて、能界は新しい時代を自らきりひらいていかねばならない。

これらの中でもとりわけ衝撃的であったのは、観世寿夫氏の早世であろう。能のみならず広く演劇状況全体を俯瞰する見識と行動力を備え、肉体的にも五十三歳という盛りの時期にあったこの

天才的演技者を失ったことの損失は、はかり知れぬものがある。少なくとも、その死により、能界は自らが持ち得た最も大輪の花を奪われたのであり、同氏によってまさに打ちたてられつつあった能の新しいあり方——演劇状況全体の中の能の担う意義を模索し、そのような立場にもとづく卓越した見識と的確な技量により、舞台作りをしていくことなど——は、より若い世代の人々へと受け継がれていくことになったのである。しかしながら、四五十歳代の役者達が、第一線として能界の主流を形成していかなければならぬ状況には、何らの変化もない。これらの人々の、地味ではあっても着実な活動が、今後の能界の可能性を占う焦点となっていくのではなからうか。こうしたたしか歩みに支えられながら、より若い世代の役者達が、徐々に力をたくわえていくことが期待されるのである。

故観世寿夫氏と同世代の役者の中では、気力あふれる充実した舞台を作りあげている野村万之丞、ここ数年連続して何らかの授賞対象となるほどの縦横の活躍を見せた野村万作の両氏を、最も注目すべきであろう。恐らく、近い将来において、最も発展の可能性の高いのが、右両氏に代表される狂言の方面なのではなからうか。世代ごとの役者の構成も安定しており、重鎮から新進にいたるまでの各世代の役者達が、それぞれに意欲的で魅力あふれる活動をくりひろげていることが、狂言界の将来に明るい材料を提供しているからである。

なお、この兩年も数々の受賞者が誕生したが、その中でもとくに注意したいものの一つだけ掲げておきたい。梅若景英能の会での〈合行〉が、54年度芸術祭優秀賞を受賞したことがそれである。

作品の本来的演出にも留意した創意工夫のある公演の成果が認められたものであり、肉体的鍛錬のみならず、演能を知的作業としても徹底させることの必要性を予言するかのごとき受賞であったといえよう。

#### 〔国立能楽堂建設の具体化〕

国立能楽堂はその建設予定地の旧建物の撤去が54年12月に完了し、いよいよ翌55年着工のはこびとなった。国立能楽堂の建設は能界をあげての要望であり、完成のあかつきには、理想的な舞台空間が提供されることになるであろうが、いうまでもなく、その意義の主体は、後継者、とくに三役の養成にあると思われる。いったい、能役者の数はとくに観世流などのシテ方に偏在し、三役がそれに比して異常に少ないことが、従来からくり返し指摘されてきた。三役の人々にとっては、今まででもかなりオーバーワークのはずである。

54年6月に水道橋能楽堂が宝生会館の名で新装落成し、地方都市での能舞台の建設も、少しずつではあるが増加の傾向にある。これらに伴ない、様々の公演が新たに設けられるのは、自然のなりゆきであろう。又、能楽堂に空調設備の完備が常識となり、野外の納涼能の類も全国的に異常なブームとなっている現今では、盛夏といえども能会は絶え間なく催されることになる。加えて国立能楽堂が完成した場合、ここだけで年間一五二日間、種々の公演が行われる予定と聞く（昭和52年国立能楽堂設立準備調査会作成の基本構想・中間まとめ）。これらのことは、能楽の普及という見地からは大いによろこぶべきことなのである。又、シテ方で

も能出演の機会の少ない若手役者にその機会をより多く与える効用も、ある程度は期待されるかも知れない。しかしながら、能の公演のみならず、無数の「素人会」が林立する現状にあっては、一千名以上のシテに都合三百数十名の三役が共演するという人的構成には基本的な無理があり、公演の無制限な増加は、必ず能の質の低下をもたらすことになるであろう。芸未熟の後継者の濫造は慎まねばならぬにせよ、それだけにかえて、組織的かつ体系的に三役の養成をはかること、その肉体的条件を超えてせつかくの才能を消耗させてしまうような超過勤務から若い有能な役者を保護し、研鑽の時間を与えることなどが、国家的な能役者養成機関としても機能することの期待されている国立能楽堂にとって、第一の緊急課題となることであろう。

### 〔新しい会の発足とその問題点・その他〕

53・54両年にも、いくつかの能会が誕生した。これらは、能役者自身の責任運営による同人組織である点でその多くに共通した性格が認められる一方、第一線級の老練から新進の若手にいたるまで、それぞれが世代的な特色と個性を色濃く保有する独自の主張にもとづいた活動を展開している点、注目に値するものである。こうした状況の中で能役者以外の主催による会の多くが姿を消したことは、一時期それらの会の特色をなしていた安易な名人大曲主義が事実上終焉したことを示している。能役者以外の主催者による会で現在でも活動しているものに、例えば東京における能楽鑑賞の会があるが、主催者の穩当な見識にもとづく適切で過不足のない選曲・人選と、健全な運営方針とが、この会の着

実な歩みを保証しているのである。

ところで、この両年に発足した会の多くは、年一回の公演をたてまゑとしている。これは、その主催者が現役の能役者であり、いわゆる後援会的な性格もないことなどにより、自身の演能の主体をそうした特別公演に置きえないという現実を反映したものである。大阪の狂言座や東京に進出した花形狂言の会などは、その回数の多少にかかわらず(狂言座は毎月公演)、若手中心の大胆な企画・構成により、そこに自らの主体をかける意欲は十二分に認められる。又、54年4月発足の翔しやうの会など、後記には紹介していないが、各流の新進・中堅役者による舞囃子会という地味な内容ながら、流派を超えた競演という点に、見るべきものがあるといえよう。同じく超流派的連帯と研究会としての性格をあわせ持っているのが集しゅうの会であり、これらの会の中では最も若い世代の人々の集まりである。

企画の大胆さでは、恐らく、花形狂言の会と三宅右近の会の右に出るものはない。彼らの試みが、狂言の芸質や芸能としてのあり方にどのような影響を与えていくのかは、なお予測不可能ではあるが、能・狂言を問わず、中堅・新進の世代に右に紹介したようなエネルギーを見出すことは、ここ数年にはなかった新しい傾向である。

しかしながら、今後十年程の能界の主流を形成していくのは、これらの大胆で野心的な実験ではなく、やはり四五十歳台の役者による充実した舞台でなければならない。その点で、たとえ年一回公演ではあっても、鼎会や大阪鯉仙会の発足の意義は小さくないのである。問題は、これらの熟達した役者達の公演が、現在の

ように拡大し多様化した観客層にどこまで斬り込めるかということであろう。公演主体にとり、その舞台の性格を決定づける意味において、観客を能動的・意図的に「選びとる」ための何らかの方策が、今や必要であると考ええる。その点、観客との交流にもとづく舞台作りを常に意識する狂言座や、斬新な企画によってその性格を明らかにしている花形狂言の会・三宅右近の会、旺盛な問題意識を真摯に追求していく姿勢の顕著な渠の会など、どちらかといえば、やや不安定な側面を残しつつも着々と力をたくわえていくことが期待される若い世代の会の方が、観客に対する独自の主張をより鮮明に打ち出していると思われるのである。

なお、53年10月に大坪十喜雄後援会能、54年11月に佐野萌演能会、同12月に金井章の会と、シテ方宝生流の演者個人の会があい次いで発足した。先に活動を開始していた今井泰男氏の玉華会、近藤乾之介試演会に続く動きで、かつて個人主催の能会を持てない定めだった宝生流の今後の動向を示すものとして注目される。

公演以外の一般的な文化事業も、いくつかの事例を紹介したい。普及活動としては、庄内能楽館の設立のごとく啓蒙と地方文化振興とを目的とするものから、対素人弟子用の市場開拓目的ともいうべきものにいたるまで、いくつかの試みが行われた。又、全国的な販路を持つ出版社から良質の解説書類が刊行されたことも付言しておきたい(研究展望を参照)。これらの活動が、潜在的な能楽愛好者に好影響を与えるであろうことを期待したい。

大きな海外公演では、ブラジル移民70周年記念行事の一環たる宝生流能楽団(国際交流基金後援)などがあるが、54年6月に能界に復帰された観世栄夫氏が、ダブリンのアベシシアター地下小劇

場で、能(鷹姫)の原作である「鷹の井戸」の演出を担当したこと(53・10)、喜多長世氏が、伝統演劇と前衛音楽との合体を企画の主眼とする西ベルリンでの第三回メタムズイク・フェスティバルに参加し、石井マキ氏の作品「面」に出演したこと(同月)は、特筆に値いしよう。公式的な文化使節としての海外公演の意義もさることながら、役者自身の見識と力量とによって他の芸能分野とかかわりあうことの意味は小さくないはずだからである。又、能の海外公演の興行としての将来性も、十分に検討する価値があるかも知れない。連日盛況であったというのであれば、なおさらであろう。

法政大学主催の国際シンポジウム「世界の中の能」にも付言しておきたい。能界でも初めてのこの大規模な試みは、国の内外における研究の現状とその方向とを明確にさし示したものであり、かつ世界の演劇における能の存在の意味と位置につき、いくつかの問題提起をなした点、意義深いものであったと確信する。

#### 〔まとめ〕

ここ数年来続いた能ブームは、いよいよその度合いを強めつつあるようである。恐らく国立能楽堂の落成がその頂点をなすことになるのであるが、こうした隆盛が過去の普及活動の成果であることは言をまたない。ただし問題はこれらの隆盛の基盤が、かなりの数の、謡曲愛好者とは無縁の知的興味やたんなる好奇心のみから能を見にくる人々をも含み込んだ多様な観客層によって支えられている事実である。このような現象は、他の演劇にとってあたりまえのことながら、少なくとも江戸時代以後の能の歴史

の上からは、まさに異常事態なのである。にもかかわらず能界は公演の増加や舞台の増設にともない大規模化しつつあり、一方、シテ方と三役との数の上での不均衡は、ほとんど是正不可能な状態にまでなっている。内に人的構成の不均衡と役者のハードスケジュールという難問を抱え、外に巨大な目きかずと化す恐れのある観客集団をかかえた能の前途は、決して洋々とはいえない。ましてや、そうした観客を集めていた眼目となるべき役者達は次々と鬼籍に入る現状である。こうした事態から導き出されるのは、能の芸質の荒廃と、この隆盛自体の突然の崩落でしかあるまい。三役を中心とする後継者の組織的・体系的な養成事業の強化と、素人弟子獲得のための市場開拓とが最も手取り早い応急措置であろうが、それだけでこの現状は打開できるであろうか。

思うに、能の公演は、以後次第にその主催者の姿勢を明確に打ち出していくことが必要となるであろうし、そこで演じられる内容についても、役者自身による十分な研究が要求されねばならぬであろう。だからこそ、肉体的にも精神的にも盛りのきわめにある熟達した役者が、重要な立場を占めるべきなのである。かかる上演者側独自の姿勢と意欲とが、自ずとその舞台の性格を決定づけ、それぞれに個性を有する公演が、さまざまな観客層をそれなりに引きよせていくような傾向が、今後は強まることが期待される。こうした形での「観客の選択」或は「観客層の調整」に成功した公演だけが、良質の芸格を保持していくような状況が、演劇としての能にとっては、最も望ましい方向なのではあるまいか。

\* \* \* \* \*

#### 【重要無形文化財保持者各個指定】

高橋 進(昭和53年3月認定・シテ方宝生流)

明治35年、東京に生まれる。大正4年、先代宝生九郎の門に入り、同年初舞台。昭和45年芸術祭優秀賞、同52年芸術選奨文部大臣賞を受賞。

三宅藤九郎(昭和54年4月認定・狂言方和泉流)

明治34年、東京に生まれる。父萬斎に学び、同38年初舞台。昭和11年和泉流三宅家を継承、九世三宅藤九郎となる。36年芸術祭奨励賞、44年同優秀賞、46年同大賞を受賞。

#### 【文化財保存技術選定・同技術保持者認定】

林 豊寿(昭和53年3月認定) 能管製作・修理

鈴木磯吉(同右) 能楽小鼓製作

長沢氏春(昭和54年4月認定) 能面製作

#### 【芸術院会員】

茂山千作(昭和54年12月就任。狂言方大蔵流)

明治29年、京都に生まれる。同34年初舞台。昭和21年十一世千五郎を襲名、同41年三世千作を襲名。同51年重要無形文化財保持者各個指定に認定。日本芸術院賞(52年)等、受賞多数。

#### 【受賞】

昭和53年度

○芸術選奨文部大臣賞Ⅱ友枝喜久夫(シテ方喜多流) 6月の朝日カルチャーセンター鑑賞能での〈羽衣〉の演技・演出により。

○芸術祭優秀賞(能楽部門)Ⅱ①茂山忠三郎・大蔵弥太郎(狂言方大蔵流) 大蔵会銀座の狂言での〈空腕〉の演技により。②玉華会(シテ方宝生流今井泰男主宰) 第六回公演(〈江口〉〈張良〉

他)全体の企画と成果に対し。

○芸術祭レコード部門Ⅱ〔大賞〕横道萬里雄・蒲生郷昭監修「口唱歌大系・日本の楽器のソルミゼーション」(CBSソニー)。(優秀賞)長尾一雄監修「平井澄子・うたとかたり」(テイチク)。

○大阪文化祭賞本賞Ⅱ①野口追善会の〈三輪誓納〉出演者一同(観世元正他) 同曲の演技により。②野村万之丞・万作による大阪能楽鑑賞会での〈鳴子〉の演技に対し。③茂山忠三郎による朝日狂言会での〈秋大名〉の演技に対し。

○京都芸術賞Ⅱ〔新人賞〕中村喜彦(石井流大鼓方)。(奨励賞)権藤芳一。

○京都新聞文化賞Ⅱ金剛巖(シテ方金剛流宗家) 能楽振興への貢献により。

○神戸新聞平和賞Ⅱ藤井久雄(シテ方観世流) 能楽振興と後継者育成に関する貢献により。

昭和54年度

○芸術院賞Ⅱ宝生弥一(ワキ方下掛り宝生流) 後継者不足の叫ばれている中で、ワキ方の第一者として活躍する一方、後進の指導育成にも顕著な業績をあげたことに対し。

○芸術選奨文部大臣賞Ⅱ田中一次(笛方森田流) 梅若万紀夫能の会別会での一管(九様乱曲)、穂高光晴後援会能での〈関寺小町〉などの演奏により。

○芸術祭優秀賞(能楽部門)Ⅱ①梅若景英能の会の〈谷行〉の企画と成果に対し。②和泉元秀(狂言方和泉流) 第31回銀座狂言の会での〈縄綱〉の演技により。

○久留島武彦文化賞(財団法人日本青少年文化センター主宰)Ⅱ野

村狂言の会 学校公演の実績に対し。

○紀伊国屋演劇賞Ⅱ野村万作(狂言方和泉流) 山本安英の会での「子午線の祀り」の義経の演技に対し。

○観世寿夫記念法政大学能楽賞Ⅱ①故香西精(兵庫米穀株式会社会長) 多年にわたる世阿弥及び能に関する卓越した研究成果に対し。②白石加代子(早稲田小劇場)「トロイアの女」「バックスの信女」等の諸作品に、観世寿夫との共演を通じて現代演劇と能との接点を示したことに対し。

【日本能楽会理事改選(昭和54年6月)】

〔会長〕喜多実

〔常務理事〕観世元正・金春信高・宝生英雄・金剛巖・和泉元秀

〔理事〕木原康夫・大西信久・片山博太郎・桜間道雄・金井章・辰巳孝・今井幾三郎・栗谷菊生・森茂好・西村欽也・森田光春・藤田大五郎・大倉長十郎・幸円次郎・瀬尾乃武・安福春雄・金春惣右衛門・観世元信・善竹忠一郎。

〔幹事〕桜間金太郎・寺井政数。

【能楽協会役員改選(同日)】

〔理事長〕坂井音次郎

〔常務理事〕藤波重和・関根祥六・桜間金太郎・大坪十喜雄・広田隆一・喜多長世・豊嶋十郎・山本東次郎・田中一次

〔理事〕梅若万紀夫・鶴沢雅・高橋汎・武田喜永・種田道雄・栗谷新太郎・宝生閑・野村万作・宮増純三・渡部晴義・小笠原八郎・吉田太一郎。

〔各支部長〕(東京)坂井音重・(名古屋)井上松次郎・(大阪)大西信久・(北陸)佐野正治・(京都)井上嘉久・(神戸)藤井久雄。

【日本能楽会第六次増員・64名(昭和53年5月末)】  
シテ方38名

〔観世流35〕青木豊・浅井宏丞・朝山清・池内隆三・井上生香・  
今井誠・梅田邦久・梅若盛義・梅若善高・遠藤六郎・大喜多信  
明・大西智久・奥善助・小野朗・笠田稔・木内十三比古・小林  
慶三・小山文彦・高橋甫治・武田欣司・塚本哲也・土田修仙・  
野村四郎・久田秀雄・平井和夫・平野元章・藤井徳三・藤谷政  
二・松田憲二・山崎英太郎・山中義滋・山村啓雄・山本順之・  
若松健史・分林弘一。〔宝生流2〕島村巖・当山興道。〔金剛流  
1〕豊嶋訓三。

ワキ方2名

〔福王流1〕植田隆之亮。〔高安流1〕谷田宗二郎。

笛方3名

〔森田流2〕松尾千代太・分野実。〔藤田流1〕寛三男。

小鼓方7名

〔幸流2〕竹村英雄・横山貴俊。〔幸清流3〕幸義太郎・後藤孝一  
郎・福井啓次郎。〔大倉流2〕荒木照雄・鶴沢速雄。

大鼓方7名

〔高安流1〕安福建雄。〔大倉流2〕寛鉦一・山本孝。〔石井流3〕  
河村総一郎・中村喜彦・吉田定男。〔宝生鍊三郎派1〕守家金十  
郎。

太鼓方4名

〔金春流3〕梶谷尚太郎・前川雪・三島元太郎。〔観世流1〕助川  
龍夫。

狂言方3名

〔大蔵流2〕木村正雄・城戸勘三郎。〔和泉流1〕能村祐丞。

【日本能楽協会会員(昭和54年11月21日現在)】

シテ方 一〇四八名〔観世流692 金春流82 宝生流151 金剛流74  
喜多流49〕

ワキ方 六四名〔高安流21 福王流23 宝生流20〕

笛方 五〇名〔一噌流9 森田流36 藤田流5〕

小鼓方 六二名〔幸流25 幸清流12 大倉流16 観世流9〕

大鼓方 四九名〔葛野流16 高安流11 石井流8 大倉流12 宝  
生鍊三郎派2〕

太鼓方 三八名〔観世流18 金春流20〕

狂言方 九四名〔大蔵流67 和泉流27〕

総計 一四〇五名

【国立能楽堂関係】

53年2月 国立能楽堂(仮称)設立準備調査会の調査養成部会で、

従来の審議内容について総括・確認。

4月 昭和53年度予算に国立能楽堂の基本設計・土地購入の  
経費として二億二二三九万円余が計上される。

11月 設立準備調査会の施設部会で、能楽協会・能楽懇談会  
の要望書に基づく文化庁作製の能楽堂設備に関する書  
類が検討される。

54年3月 国有財産関東地方審議会において、渋谷区千駄ヶ谷四  
―18―1の大蔵省普通財産の土地八三〇九㎡(国立能  
楽堂建設予定地)を文化庁に有償所管換えることが  
答申される。

4月 昭和54年度予算に施設整備・土地購入・実施設計等の



経費として六億九千九百二十六万円余が計上される。

5月 施設部会で工事の基本計画や予算についての報告や、設計者の説明が行われる。

12月 建設予定地内の旧建物の撤去が完了。

### 【海外公演】

宝生流能楽団南米公演(53年6・7月)

サンパウロ・ブエノスアイレス・ニューヨーク・ロサンゼルスなどで、能〈経政〉〈羽衣盤渉〉、一調〈船弁慶〉を、テレビ放送や追加公演を加え、計12回公演。参加者は、今井泰男・小倉敏克・高橋勇・塚田光太郎・中村孝太郎・本間英孝・三川泉・渡辺三郎・森常好・寛三男・福井啓次郎・寛鉦一・鬼頭喜太郎。文芸顧問に、鳥越文蔵早稲田大学教授。

梅若万紀夫アメリカ公演(53年8月)

ニューヨーク市でのアメリカ演劇協会一九七八年度年次大会への参加をはじめ、その前後に、ブリティッシュ・コロンビア大学・ウィスコンシン大学・ボストン美術館・ハーバード大学・ロープ小劇場・メキシコ民族舞踊学院などで、能〈葵上〉の実演と講演、セミナーなどを行った。参加者は、梅若万紀夫・梅若猶彦・日根幹祐・宗片邦義静岡大学助教授の四名。

### 【文化事業など】

庄内能楽館(山形県酒田市)

昭和53年12月、能楽の継承・振興と地方文化への寄与をめざして発足。能楽関係諸資料の収集・公開と、付設舞台での公演等、多様な事業を企画。理事長は発願者の池田康子酒田ユネスコ協会会長。館長は増田正造武蔵野女子大学能楽資料センター主任。

右両氏を加えた十数名の能役者・文化人から成る理事会が運営にあたる。犬塚又太郎致道博物館館長・酒井忠明酒井家当主・本間裕介本間美術館館長を顧問とする。

能楽センター(兵庫県神戸市)

昭和54年10月、能楽関係の情報サービスと練習教室の一般公開を目的に発足。神戸能楽会(上田照也理事)主宰。

早稲田大学演劇博物館五十周年記念行事

昭和53年10月・11月。同館での館蔵名品展、都内各所での諸展示のほか、9月末から11月末まで、同大小野講堂で講演や映画上映を行なった。その一環として11月下旬から翌年1月末まで、オーストリア演劇博物館でも日本演劇展を開催。

国際シンポジウム・世界の中の能

昭和54年12月。法政大学主催。詳細は彙報参照。

「幽玄——観世寿夫の世界」展

昭和54年12月。於池袋西武美術館アート・フォーラム。渡辺守章構成。内容は、観世寿夫の足跡をたどり、その業績をしのぶべく、舞台写真とビデオ・映画による映像資料を展観し、渡辺守章構成・総合司会によるシンポジウム(於、コミュニティ・カレッジ「スタジオ200」)をも、観世寿夫と能(表章・小山弘志・金春惣右衛門・増田正造)、現代音楽と能(一柳慧・観世栄夫・武満徹・湯浅譲二)、現代演劇と能(白石加代子・堂本正樹・中村雄二郎・野村万作)、観世寿夫と現代(加藤周一・観世静夫・坂東玉三郎・横道萬里雄)の各テーマで開催したもの。

## 【物故者】

## ● 豊嶋弥左衛門

本名豊嶋弥平。シテ方金剛流。昭和53年1月3日、肝臓障害のため京都市東山区知恩院山内林下町の自宅で死去。享年78歳。明治32年広島に生まれ、大正2年金剛謹之輔に入門、以後先代金剛巖・同右京にも師事。大阪市民文化祭賞・大阪府民劇場賞・広瀬賞・芸術祭大賞など受賞。昭和32年日本能楽会会員。52年重要無形文化財各個指定保持者(人間国宝)に認定。

## ● 高安 滋郎

ワキ方高安流宗家。昭和53年4月25日、髄膜炎のため名古屋第二日赤病院で死去。享年61歳。大正6年元尾州藩高安流ワキ方西村弘敬の長男として生まれ、昭和4年高安流宗家を再興・継承。元能楽協会名古屋支部長。日本能楽会会員。

## ● 野村 万蔵

本名野村万造。狂言方和泉流。昭和53年5月6日、肝臓癌のため東京都新宿区聖母病院で死去。享年79歳。明治31年東京に生まれ、父萬斎に師事。大正11年家督相続、12年万造を襲名。昭和15年万蔵に改名。38年以後数回に亘って欧米に渡り、狂言を海外に紹介し指導した。32年文部大臣芸術選奨、37年芸術祭賞、44年芸術院賞、46年芸術祭大賞を受賞するなど数々の賞を受賞。32年日本能楽会会員、42年重要無形文化財保持者個人指定(人間国宝)、49年芸術院会員。明治43年以来能面制作にも携り(下村清時門下)数少ない面打ちの一人であった。著書に『狂言の道』『狂言面付装束と小道具』『夏に技冬に声』がある。

## ● 網野 菊

小説家。昭和53年5月15日、腎不全のため東京都渋谷区千駄谷の代々木病院で死去。享年78歳。志賀直哉に師事し、大正末年から私小説作家として活動を続け、昭和43年には芸術院賞を受賞、44年芸術院会員となった。古典芸能にも親しみ、能や狂言に関する文章も多く、芸術祭の能楽部門審査委員を勤めたこともある。

## ● 谷口喜代三

大鼓方石井流。昭和53年5月28日、心不全のため京都市西京都病院で死去。享年82歳。昭和23年から石井流宗家代理を勤め、40年日本能楽会会員、51年には京都市文化功労者に選ばれた。

## ● 野口 禄久

本名野口増寿。シテ方宝生流。昭和53年5月30日、急性心不全のため、稽古先の大分市で死去。享年67歳。故野口兼資の女婿。日本能楽会会員。

## ● 大山 順造

シテ方観世流(準職分)。昭和53年7月15日、骨髄腫のため大阪成人病センターで死去。享年65歳。日本能楽会会員。

## ● 福岡 周斎

シテ方喜多流。昭和53年7月22日、肝不全のため川崎市登戸の聖マリアンナ医大病院で死去。享年77歳。日本能楽会会員。主として地謡方として活動した流儀の古老。

## ● 大江又三郎

本名大江正雄。シテ方観世流。昭和53年8月18日、心不全のため大阪暁明館病院で死去、享年67歳。京都能楽会相談役。日本能楽会会員。

## ● 高橋 甫治

シテ方観世流。昭和53年9月16日、急性心不全のため宿泊先の大阪・ホテル新大阪にて死去。享年41歳。日本能楽会会員。

## ● 米良 幸展

小鼓方幸流。昭和53年10月29日、心筋梗塞のため福岡市東区の自宅で死去、享年66歳。

## ● 観世 寿夫

シテ方観世流。昭和53年12月7日、胃癌と癌性胸膜炎のため東京都港区虎の門病院で死去。享年53歳。大正14年、七世観世鍔之丞の長男として東京に生まれ、祖父華雪に師事。能界での活動はもとより、現代演劇・音楽劇などの分野にも進出し、なかでも、新劇人らと共に結成した「冥の会」でのギリシャ悲劇上演は注目された。国際交流・海外公演にも力を尽し、昭和29年の海外初公演にも参加したが、最近では昭和51年9月～10月に演能集団「世阿弥座」を組織して欧州各地を公演した。38年芸術祭奨励賞、39年大阪市民文化賞、49年芸術祭優秀賞、51年モービル音楽賞など受賞。著書には『能面』『世阿弥』（共著）・『心より心に伝ふる花』などあり、論考は多数。

## ● 坂本 欣司

本名坂本泰治。能楽評論家。昭和54年1月5日、心筋梗塞のため死去。享年65歳。大阪東住吉税務署に三十年勤務のかたわら能楽評論にも健筆をふるった。

## ● 香西 精

能楽研究家、兵庫米穀株式会社社長。昭和54年1月12日、肝硬変のため神戸市生田区原泌尿器科病院で死去。享年76歳。明治35

年生まれ、岡山県出身。東大卒業後甲南高校教授、昭和八年病気退職の後、兵庫食糧営団に入り以後食糧関係業界にあって活躍する一方、神戸女子大学教授等を歴任し、能楽研究に力をそそいだ。世阿弥研究の第一人者として、『世阿弥新考』『続世阿弥新考』『能謡新考』の三部作や、没後刊行の『世子参究』等の著書がある。藍綬褒章受章。神戸新聞平和賞・兵庫県文化賞等受賞。法政大学能楽研究所顧問。

## ● 杉浦 友雪

本名杉浦留次郎。前名義朗。シテ方観世流。昭和54年1月26日、老衰のため京都市中京区の自宅で死去。享年90歳。明治22年大阪に生まれ、38年片山九郎三郎（後の観世元義）に入門、昭和7年職分となる。42年京都市文化功労者に選定。43年、義朗から友雪と改める。日本能楽会会員。京都観世会副会長、能楽協会京都支部相談役、京都能楽会理事長等を歴任。

## ● 丸岡 大二

能楽評論家、能楽書林社主。昭和54年2月16日、脳動脈瘤破裂のため東京都新宿区の慶応病院で死去。享年65歳。戦前は雑誌『謡曲界』、戦後は『能楽タイムズ』の編集にあたり、昭和43年から能楽書林社長。また41年から51年まで朝日新聞（東京）の能評を担当した。著書に『能―鑑賞のために』『謡の総心得』等がある。芸術祭能楽部門の企画員・審査員を長く勤め、国立能楽堂設立準備調査会委員も勤めた。

## ● 梅若 六郎

本名梅若亀之。シテ方観世流。昭和54年2月18日、急性腎不全のため東京都新宿区の東京女子医大付属病院で死去。享年71歳。

明治40年、二世梅若実の長男として生まれ、一時景英を名乗り、昭和19年六郎と改め梅若家当主(五十五世)となる。29年、大正以来の観世・梅若の分裂問題に終止符を打ち、観世流に復帰。35年初の能楽専修学院たる梅若能楽学院を設立。大正4年「菊慈童」で初シテを勤めて以来、昭和50年11月の「関寺小町」上演で現行曲のすべてを演じたという。芸術祭文部大臣賞受賞・日本能楽会会員。42年芸術院会員。

●奥野 達也

シテ方金剛流。昭和54年3月12日、急性心不全のため東京都世田谷区駒沢病院で死去。享年82歳。大正6年先々代宗家金剛右京に師事、右京没後に東京金剛会を創立・主催して今日に至った。能楽協会理事・同東京支部長等を歴任、日本能楽会会員。

●西尾 実

国文学・能楽研究家、法政大学名誉教授。昭和54年4月16日、老衰のため東京都杉並区和泉の自宅で死去。享年89歳。明治22年、長野県生。大正4年東京大学国語国文学科卒業、長野県松本女子師範学校、東京女子大学、法政大学等の教授を歴任、戦後は昭和24年から11年間にわたって国立国語研究所長を勤め、同時に法大教授・同能楽研究所所員でもあった。戦前戦後を通じて中世文学研究・国語教育に力を注ぎ、世阿能楽論研究でも常に第一線にあって学界をリードしていた。それらの成果は、『中世的なものとその展開』『道元と世阿弥』『世阿弥の能芸論』等の著書および『西尾実国語教育全集』などによって見ることができ、紫綬褒章受章。

●新関 良三

演劇学研究家。元埼玉大学長。昭和54年4月27日、気管支肺炎

のため横浜市戸塚区の国立横浜病院で死去。享年89歳。ドイツ演劇、ギリシャ・ローマ演劇研究の権威で、昭和33年学士院恩賜賞、日本芸術院賞を受賞。能・狂言に関する演劇論や随筆も多く、それらは『新関良三演劇論文集』等に収められている。

●武藤 達三

本名武藤吉造。狂言方大蔵流。昭和54年7月5日、心不全のため京都市鞍馬口病院で死去。享年81歳。二世茂山千作に師事。昭和47年日本能楽会会員。

●三田和信

大鼓方高安流。昭和54年7月9日、旅行先の金沢で心筋梗塞のため死去。享年32歳。安福春雄氏に師事、能楽養成会第三期卒業。

●梅村平史朗

本名梅村平四郎。シテ方金春流。昭和54年8月29日、肺気腫のため東京蒲田総合病院で死去。享年73歳。桜間弓川に師事。昭和40年日本能楽会会員。